



岩倉神社の舞台(市指定有形民俗文化財)



昭和30年代 岩倉神社舞台での歌舞伎公演(白浪五人男)



平成21年 岩倉神社舞台での歌舞伎公演(白浪五人男)

目次

・民具調査だより-4「魚をすくう道具ーセセリ」	2
・特別展への道 ～地芝居と農村舞台～	3
・平成23年度 豊田市近代の産業とくらし発見館 企画展「百々貯木場と今井善六」	4
・古民家の見方① 土蔵にみる耐火の工夫	5
・下山地区の遺跡 ー遺跡分布調査についてー	6
・博物館ってどんなところ? 豊田市郷土資料館と博物館活動の今後	7
・文化財シリーズ 77 市指定文化財 旧海老名三平邦飛宅	8
・資料館NEWS	8

魚をすくう道具ーセセリ

はじめに

豊田市内各所で有形民俗資料の調査・資料台帳づくりを行なっています。作業は収蔵資料一点ごとに、その資料を的確に表せる距離と角度で写真を撮り、材料を確認し寸法を計り、各所での呼び名と標準名などを記入していきます。そんな中で、同じ資料が何点も続くと、時として気持ちが流され雑な仕事をしてしまう事もありますが、逆にその資料の美しさにハッとてしばらく見入ってしまうという場合もあります。

今回は、1万5000点ほどの資料を見てきた中で、私が「単純な作りなのに、なんてきれいなんだろう」と関心してしまった“セセリ”を紹介します。

セセリまたはブツタイ

この民具は、細い割り竹を簀^す状に編み（のり巻きを作る簀^すの大きな物を想像して下さい）、一方を竹を互い違いに組み合わせ綴じ、そこに柄を取り付けもう一方の両端から水に強い紐を渡し、取り付けた柄の先端、手元にあたる部分と連結します。柄を立てると紐と連動し両端が付いてくる仕組みの道具です。

関東発祥の漁具だとされ、東京や埼玉では“ブツタイ”と呼ばれ（静岡では“ボツタイ”）ており、大中小の大きさがあつたようです。現在は、網を使った小さな物が流通しています。網が貴重であった時代に手近な竹を用いて自家で作ったり、竹の扱いに達者な人に作ってもらいました。

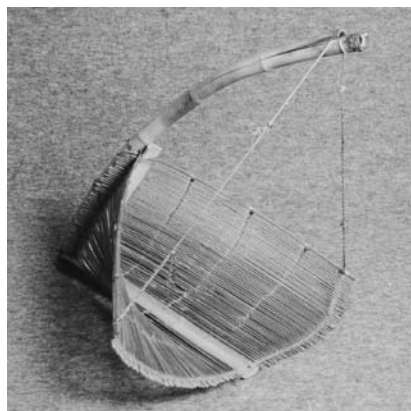
稲武郷土資料館に展示してある資料には“セセリ”と表示されており、旭郷土資料館のそれは、具体的な名で“イシャンコ用^{うづ}釜”と表示されています。

日本の各地では“ブツタイ”“タカアミ”“ジョレン”“ゴリスクイ”などの呼び名があります。

漁具か遊び道具か

流れにセセリを仕掛けておいて、少し上手から足で獲物を追いよせてすくいあげ、小魚や小海老を捕らえました。大きな流れの本流ではなく、田んぼの中の小川や本流の河原にできた水たまりなどで使われました。私の子供の頃にも同じように、“タケミ”を使って小さな流れに仕掛けて追い込んだり、茂みに突っ込んでガサガサやってフナやドジョウを捕りました。

網漁法、釜漁法、釣漁法以外の漁法を雑漁法に分類しますが、セセリを使った漁はこの雑漁法にあたります。セセリは漁を生業としている人が用いる道具では



●セセリ [稲武郷土資料館]
W640 H660 D640



●イシャンコ用釜 [旭郷土資料館]
W430 H640 D805

なく、楽しみで魚捕りをする大人が使うものであり、子供達にとっては遊びの道具以外のなにものでもありません。

各資料には、その用いられ方を把握して分類のためのコード番号を振りますが、このセセリのように漁具ではありますが生業のための道具だと言い切れない物などが現れると分類に一瞬とまどいます。しかし、それも作業の楽しみのひとつでもあります。

美しいということ

民具は私たちの生活に密着した道具でありますので、“民芸”などと呼ばれるカテゴリーには属しません。質実剛健で使用目的に合った形や大きさであり、用いられる材料が的確に使われている事で、道具として成立している物達です。ですが、今回紹介したセセリのように、平らな簀の一辺を寄せて合わせ、そこに柄を付けると三角形の袋状の形態をした道具が出現する…。 “美”を求めることをしない民具ですが、セセリはなんとも美しい。 (東海民具学会 岡本大三郎)

～地芝居と農村舞台～

豊田市郷土資料館では毎年、特別展を開催しています。平成23年度特別展では、市内に残る歌舞伎衣裳とその文化を紹介します。詳しくは下記の通りです。

タイトル：「歌舞伎の衣裳と文化

～地域に息づく農村歌舞伎～」

と き：平成23年9月17日～11月27日(月曜休館)

場 所：豊田市郷土資料館(陣中町1-21)

観 覧 料：一般300円 大学・高校生200円 ※70歳以上、中学生以下、豊田市在住・在学の高校生、障がいのある方およびその介護者1名は無料(要証明書等提示)

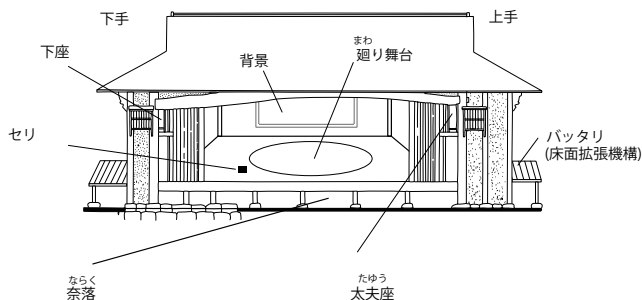
「歌舞伎」と聞くと、まずテレビで見かける市川団十郎や市川海老蔵、松本幸四郎や中村勘三郎などの歌舞伎役者を思い浮かべるのではないのでしょうか。そのため、歌舞伎を観るということになると、国立劇場や御園座などの劇場(芝居小屋)で観る、ちょっと敷居の高いものだと思っている方が多いかもしれません。しかし、歌舞伎は何も劇場だけで観るものではありません。近代(明治～昭和30年代)の豊田市域では、各地で歌舞伎を観ることができたのです。「地芝居」という名の歌舞伎を。

地芝居とは農村などにおいて、村人が役者になりきり演じる芝居のことで素人芝居ともいわれ、主に歌舞伎が演じられてきました。役者も村人、観客も村人。まさに村人が総出で行うイベントだったのです。このイベントは祭りの奉納行事として毎年、もしくは数年に一回行われてきました。そんな奉納歌舞伎の舞台となったのが、今でも神社の一角に佇む農村舞台です。かつては、この舞台で村人が歌舞伎を演じ、舞台前に敷物を敷いた観客が食べて飲んで、役者も観客も大いにその日を楽しんだといわれています。



昭和22年の小原歌舞伎

こうした舞台が豊田市内には現在でも78棟残っており、全国屈指の農村舞台の多い自治体となっています。これまでに失われてしまった舞台も含めると、少なくとも130棟を越えます。農村舞台は特に山間部に多く分布し、歌舞伎が盛んであったことを今に伝えていきます。市内に残る農村舞台には本格的な歌舞伎舞台としての機能である廻り舞台やセリを持つものもあり、当時の村人の歌舞伎への関心の高さがうかがわれます。また、農村舞台自体にも歌舞伎が行われていた証拠を見つけることもできます。農村舞台正面に向かって右側に作られた太夫座「歌舞伎を行うにあたって語りを



農村舞台の名称・機能説明

行うナレーターが座る場所)には、当時行われた歌舞伎演目や役者名、太夫名の墨書が残されている舞台もあります。こういった墨書から他地域との交流や旅役者の存在を知ることができます。稲武の神明神社には明治期に名古屋の役者を呼んで歌舞伎を行った墨書が残り、旭・小原地区には岐阜県的美濃地域との交流を示す墨書を確認することができます。農村舞台を巡るときに、建築的な要素もさることながら、書き残された歌舞伎の記録を確かめ、歌舞伎が行われた当時の情景に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

このように近代の農村で行われた歌舞伎は、村人の手で準備され、運営されてきました。そのため、歌舞伎は現代より身近で、親しみやすい芸能であったことでしょう。

特別展では、歌舞伎文化を衣裳や幕、古写真、浮世絵等で紹介します。また、豊田市出身でプロの太夫であった竹本辰美太夫や旅役者の市川団結等も紹介しています。是非、郷土資料館へ足をお運びください。

(井上直己)

企画展「百々貯木場と今井善六」

豊田市を貫流する矢作川は昭和の始めごろまで、物資を輸送するために川船が盛んに利用されていました。また、山間の豊富な森林資源は、丸太のまま流す管流し(川狩りとも言われた)や筏で下流の地域へ送られていました。

その木材の流通で栄えたのが、「百善^{どうぜん}」こと百々^{どうど}町の今井善六でした。今井家は、慶長15年(1610)に木曽福島より三河国加茂郡平井村百々に移り住み、明治中頃には材木商として財をなし、西加茂郡の土地所有者番付の西の大関に張り出されるほどでした。

百善は上流で買い付けた山間の樹木を農閑期である冬期に現地の人々を雇って伐採し、川に流して百々に送りました。ここで筏を組み直したり、製材したりした木材をさらに岡崎や西尾など下流の地域へ流送し、供給しました。古鼠^{ふるそ}や平古には筏師が多く、当時校長先生の月給が40円程度だった頃に、一日3～5円という高い日当を稼いでいたそうです。

一方、明治22年9月の洪水では3,000本が流され、挙母警察署に届けが提出されるなど、流送には、大変な困難や労苦があったようです。散逸した木材の回収の際ももめ事が度々あり、第13代善六種三郎は、これを解消するために水中貯木場の建設を計画しました。

大正6年(1917)に愛知県知事に提出した「河川水利使用貯水池開鑿放水許可申請書」(当資料館蔵)には、洪水時の散逸防止の他に、木材を陸揚げすることなく貯木できる点や夏場の木材の割裂を防ぐなどの利点も建設の理由としてあげています。

同年11月10日に貯木場の工事が開始され、翌大正7年(1918)6月15日に竣工しました。総工費は約48,600円で、名古屋市春日町(現在の中区上前津)の黒川完成が請け負いました。貯木場の規模について以下のように記されています。

池床面積…1087.75坪(3,590㎡)
池床高…矢作川最大濁水位より2.5尺(76cm)下
周囲の堤延長…130.3間(237m)
提高…池床より27尺(8.2m)
樋門高(中央部)…14.3尺(4.3m)
樋門幅…15尺(4.6m)

貯水池内部は、木材の種別や発注者分けのための6本の突堤(5.5～10間=10～18.2m)を備え、さらに陸揚げ用に勾配をつけた27間(49m)の突堤も設けられていました。



残念ながら善六種三郎は、完成を目前に逝去してしまいます。また、昭和4年、上流に越戸ダムが建設されたことにより矢作川を利用した舟運や木材の流送が衰退し、貯木場の役割もわずか10年余りで幕を閉じることとなりました。しかし、河川の中流域に位置する水中貯木場としては、国内稀有の産業遺産であり、民間施工の大規模な人造石構築物としても最終期の近代化遺産として貴重な資料といえます。

発見館では、今井家所蔵の資料や写真パネル、岡崎市美術館所蔵の木製川船模型(1/10)のほか、百々貯木場のジオラマ(1/100)などにより、当時の舟運や木材の流送の様子、貯木場の建設や木材の流通に関わって働いた人々の姿を豪商今井家の歴史とともに紹介しています。



錨



滑車



径尺



筏

今井家で使われた道具(今井家寄贈)

(杉本 満)

土蔵にみる耐火の工夫

木の生育に適した環境である日本では、豊かな森林資源を生かして、古来より多くの建造物が木造で建てられてきました。現在でも新築戸建て住宅の8割が木造で建てられています。

建築資材としての木材は、軽くて強く、加工もしやすい優れた材料です。しかし最大の弱点は、火事に弱いということです。

昔から、木造建造物は火災に遭ってきました。豊田市の足助の町並みでも、安永4年(1775)に大火が起きており、『足助村誌』によると、「僅ニ二三戸焼ケ残りシト云」とあり、大火により大半の建造物が焼けてしまったとのこと。足助の町並みに現存する民家に安永の大火前の建造物はほとんどありません。

そんな木造建造物には、耐火性能を高める工夫がされた土蔵があります。土蔵は、もともとは貯蔵庫であり、たくさんの土蔵を持つというのは富の象徴でもありました。木造の骨組みに土を厚く塗り固めた文字通りの土で造った建造物です。



写真1 旧紙屋鈴木家は、かつて足助随一の商家でした。屋敷の中には、6棟の土蔵が残っています。

土蔵には、防火性を高める様々な工夫がされています。屋根は防火性が高い瓦でできており、軒は短くなっています。屋根廻りに漆喰が塗ってあります。

なぜ軒が短いデザインなのかというと、軒裏は火事の際に最も熱がこもりやすく燃えやすいからです。足助でも大火の教訓から、町家建築にも塗籠めと言って軒裏を漆喰で覆ってある建造物が多く存在します。一方、野地板が露出している建造物も見られますが、これらは比較的建造年が新しいものに見られます。大火

から時間を経て教訓が薄れたのかもしれませんが。

軒が短い建造物は、壁が雨に晒^{さら}されます。土壁を雨から守るために工夫が必要になります。そこで生み出されたのが、なまこ壁です。

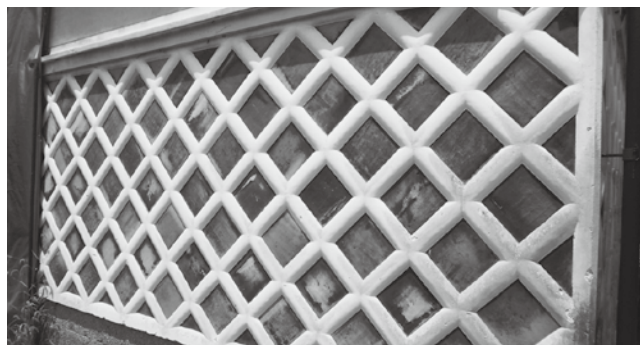


写真2 旧紙屋鈴木家の土蔵のなまこ壁

なまこ壁をご存知でしょうか。幾何学模様の白と黒の壁のことです。盛り上がっている白色の漆喰の部分が海にいる「なまこ」のようなので、なまこ壁と呼ばれています。黒い部分は、平瓦という瓦で、屋根に載っている瓦と同類のものです。瓦のもつ耐水性の特徴を生かし、瓦を規則正しく並べ、瓦の隙間を漆喰で埋めています。雨による土壁の劣化を防ぎます。なまこ壁は、機能と美を兼ね備えた優れた工法なのです。



写真3 足助の町並みには、土蔵を改造している建物もみられます。

このように土蔵などの木造建造物には、火事と戦う工夫が隠されているのです。足助には、近世からの様々な時代の建造物が建っています。軒を塗籠めである建造物や野地板が露出しているもの、土蔵を改造した建造物やなまこ壁など、多様な姿をしています。そんな目で足助のまちを散策してみたいいかがでしょうか？

(松川智一)

下山地区の遺跡

－遺跡分布調査について－

藤岡・小原・足助・旭・稲武・下山の6地区は、平成17年4月に当市に合併しました。歴史豊かな各地区の遺跡(埋蔵文化財)について、後世へと守り伝えるための基礎情報として、遺跡地図作成を平成18年度から続けています。22年度、下山地区の現地踏査を行い、23年度は下山地区の地図と、最終的な6地区の調査成果報告書を作成しています。

現地を歩き、地表面に散布する遺物を採集すること無くして、遺跡地図を作成することはできません。耕作地など、地表面の観察が可能な地点での成果を基に、地形を確認しながら遺跡範囲を設定していきます。遺物の分布状況や地形の解釈については、観察者の主観が入る余地も大きいので、市職員に加え、有識者として南山大学 黒沢 浩准教授と共に現地へ赴き、周知の埋蔵文化財包蔵地と、22年度の現地踏査において遺物が採集された地点について確認を行っています。

「遺跡を探して山里を歩く」というと夢のある作業のように聞こえるのではないのでしょうか？遺跡は、地域資源の保護や活用を目指す立場からは「財産」と言えます。しかし一方、開発者の立場で考えると、埋蔵文化財包蔵地では、事業に先立ち行う発掘調査の経費・期間について負担が想定されます。以上から、昨今、遺跡位置・状態に関する高精度の情報が求められているのです。

『下山村史』(下山村1986)によると、下山地区内の遺跡は、すでに昭和12年、石ノ塔遺跡(和合町)において磨製石斧が採集され、小栗鉄次郎氏により広く紹介されています。それ以降、地元で採集された資料を基に遺跡位置が把握され、平成22年度当初には、43遺跡が知られていました。他の旧町村部と比較すると、藤岡100(123)遺跡、小原38(65)遺跡、足助182(200)遺跡、旭58(151)遺跡、稲武148(162)遺跡(各地区の遺跡数は、カッコ無：調査前／有：調査後)と、小原地区に次いで数が少ないことがわかります。一方、縄文時代と中世の遺跡(遺物散布地)が多い点については、足助・旭・

稲武地区などの遺跡が集中する地区に類似し、かつ好立地でありながら、明らかな遺跡空白地帯も存在することから、遺跡数が激増する可能性も考慮されました。

今年度は、昨年度現地で行った遺物採集の状況を書いた地図を参考に、地区西部域より順に遺跡の範囲確定を行っています。

従来遺跡の空白地帯であった下山田代町・花沢町・大沼町の郡界川沿いには、昨年度の調査の段階で、中世陶器(山茶碗・古瀬戸系陶器など)が多数の地点で採集されました。このような地点を全て「遺跡」として評価してしまうと、遺跡であった場所から、洪水・耕地改良に伴い遺物が移動した地点も「遺跡(埋蔵文化財包蔵地)」としてしまうことがあります。周辺に比べ集中して遺物が分布する地点を抽出しつつ、次に地形を観察します。河川が大きく蛇行する周辺、河川合流地点周辺は、安定した平坦面が確保でき、古い時代から集落立地として好まれています。「遺物の分布状況」および「地形」の観察から、遺跡の位置と範囲が決められていくのです。先に「空白地帯」と述べたこのエリアは、中世を主体に、縄文時代も含む遺跡が高密度に分布する地域であることがわかりました。特に田代城跡周辺は広域な範囲が遺跡となり、中世城館とセットとなる集落の存在が予測されます。

一方で、周知の埋蔵文化財包蔵地でありながら、現状では現地に足を運んでも全く遺物の散布が確認できない地点もあります。他の地区も同様ですが、昭和40年代後半から平成にかけて行われた土地改良により、多くの遺跡が削平・埋没し、その位置と範囲が確認できなくなっています。農地確保のための施策として歓迎された事業でしたが、荒地と化したかつての耕作地を見るたびに、複雑な気持ちになります。いかにこの約30年間で、地域に残された「歴史資源＝遺跡」にとって過酷な状況であったかが実感されます。

(高橋健太郎)

博物館ってどんなところ？

豊田市郷土資料館と博物館活動の今後

「博物館」というと、どんなイメージを持つでしょうか。「楽しいところ」というよりは「勉強するところ」といったイメージがあるのではないのでしょうか。また、具体的には「使われなくなったモノや、歴史の資料がいっぱいある」「古いモノを展示している」「昔のことを教えてくれる場所」といった内容を思い浮かべるのではないのでしょうか。豊田市郷土資料館の活動を通して、資料館が目指す「博物館」を紹介します。

豊田市郷土資料館の活動

・資料を集め・保存する

豊田市郷土資料館は郷土の歴史をテーマにした博物館施設です。郷土の歴史や文化のことが分かるモノ＝資料を保存し・管理しています。

これらは購入したものもありますが、多くは市民から寄贈を受けたものです。中には発掘された品や美術工芸品もあります。では、なぜ資料を集めるのでしょうか。歴史的な資料からは、そこに暮らした人々の足跡がわかります。資料から町の歴史を知ること、どのようにして今の町ができたかが分かります。現在が分かるとこれからどうしたらいいかを考えるヒントになります。また、かつての生活道具からは人間の生活の変化を知ることができます。さまざまな道具のしくみからは、技術の向上の過程を見ることができ、そこから新たな技術や人間の知恵を生かすヒントを得ることができます。

このように考えると一つ一つのモノは、未来への財産だと考えられます。

・展示をする

資料を何らかのテーマに基づいて展示し、地域の歴史を紹介しています。こうした展示は単に今ある資料を並べるだけではありません。1つの資料を手がかりに調査し、新たに見つかった資料や歴史的な事柄を紹介していきます。1つの資料では分からなかった事柄が

多くの資料を集めることで分かったり、特徴があらわれたりします。

点と点が繋がり線となり、その線が増えて面となり、地域の特徴が見えてくるのです。展覧会を見たお客さんが家にもこんながあると教えてくださるなど新たな展開がある場合もあります。見るだけの展示ではなく新たな発見がある展示を目指していきたいと考えています。



展示をする様子

・教育普及活動から体験学習へ

これまでの博物館は、調査研究した事柄を、市民に伝える活動として教育普及活動を行っていました。展示解説や講演会などがその内容です。しかし、博物館からの一方的な「教育」「普及」という活動ではなく、来館者が体験することで体感理解することができる、疑問に思ったことを自ら調べることができる、そんな活動の展開を目指しています。現在資料館ではこども向けに体験講座を多く実施していますが、石臼体験やおこしものづくりなどは、大きく生活が変化している昨今では、大人にも珍しい体験です。こうした体験をすることで現在の生活を見直すきっかけとなり、地域を見直す機会となると思います。

これからの博物館＝資料館は「楽しい」場所となることを目指しています。来館者が新しい発見をし、自分で調べて納得する面白さを体験する場所です。

学習した内容や伝承されている事柄をさらに後世に伝える担い手となる市民が一人でも増えるよう、今後も活動を続けていきたいと思っています。(伊藤智子)



資料を調べる様子

文化財シリーズ

77

市指定文化財 旧海老名三平邦飛宅 (江戸後期小農家)

平戸橋町石平地内にひっそりとたたずむ古民家があります。これが旧海老名三平邦飛宅です。海老名三平邦飛は、「挙母藩維新の三傑」の一人西川徳化の実兄で、千葉周作門下で剣術を学び、挙母藩校崇化館・尾張藩明倫堂の剣術師範を務めました。明治4年(1871)7月、廃藩置県により挙母県が成立すると、租税や出納をつかさどる会計課と兵器を管理する軍事課を兼任し、県政を支えました。この頃に海老名三平邦飛が居住していたといわれる建物です。

この建物は、もとは豊田市花本町にあったものですが、道路拡幅のため市が譲り受け、現在の場所に移築保存しました。江戸時代後期に建築された建物で、6畳2間に土間・押入のみという、生活に必要な最低限と考えられる間取りになっています。花本地

区の一般的な農家であり、かつ現在市内に残されている江戸時代後期に建てられた同規模の家屋の中で最も保存状態が良いものであるため、当時の一般的な農家を知るうえで最適な建物であるといえます。

旧海老名三平邦飛宅は平戸橋町にある旧本多静雄邸の敷地内にあり、江戸時代における一般的な農家の生活ぶりを感じることができます。



資料館NEWS



7月24日(土)に親子講座「昔のくらしを知ろう!」を開催しました。東海民具学会の岡本大三郎先生による企画展「古い道具と昔のくらし〜

見直そう!昔のくらし〜」の解説を聞きながら、実際に昔の道具を体験してみるというものです。

杓ますの説明の際に、岡本先生から子ども達にクイズが出されました。「【春夏秋冬二升五合】これは何と読むと思いますか?」「う〜ん、春・夏・冬…あつ秋がない!」「そう、春夏秋冬は【秋ない】だから、【商い】になるね。二升しょうは一升の杓が2つだから【杓杓あきな】、五合は1升はんじょうの半分で【半升】。つなげると【商い・ますます・繁盛】

です。昔の人はこういったものを広告などに入れていたんだよ。」といった面白いお話をたくさん教えていただきました。



なかでも子ども達は、かつお節削り器の体験に目を輝かせていました。かつお節の削り方を教えてもらい、一人一人が手を削らないように注意しながら削りました。自分で削ったかつお節の味は格別だったようで、子ども達は「美味しい!」「家に持って帰ってふりかけにする!」と言いながら、笑顔でかつお節を食べていました。

お話や体験を通じて、昔の人の生活の様子や工夫を身近に感じることができ、子どもも大人も大満足の講座でした。

利用案内

開館時間 9:00 ~ 17:00
休館日 毎週月曜日(祝祭日は開館)
入場料 無料(特別展開催中は有料)
交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分
名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分
愛知環状線「新豊田駅」より 徒歩15分
とよたおいでんバス「陣中町一丁目」より西へ徒歩5分
駐車場 約20台

■豊田市郷土資料館だより No.77■

平成23年10月5日発行

編集・発行 豊田市郷土資料館

〒471-0079 豊田市陣中町1-21

☎ (0565) 32-6561 FAX (0565) 34-0095

E-mail: rekihaku@city.toyota.aichi.jp

URL: <http://www.toyota-rekihaku.com>

※豊田市郷土資料館だよりはHPでもご覧になれます。